

寄稿 早瀬 徹

私は石川県加賀市大聖寺本町にお住まいの朝倉正夫さん(へも)を訪ねた。私の亡父から、正夫さんの兄の正一さんの遺影となった飛行服を着た出陣姿の写真を見せられていたからだ。遺影は、昭和二十一年(一九四六)年三月に戦後初めて開かれた石川師範学校昭和十八年本科一部卒業組のクラス会で皆に配られ、父は彼の戦死を初めて知った。

朝倉さんの実家は谷あいの加賀市山中町今立にあつた。大正十一年(一九二二年)生まれの正一さんは長男で、師範の卒業前に茨城・土浦の海軍航空隊に入っている。二番目の兄正二さんは商船学校へ。三男が正夫さんで、昭和二十三年三月

石川師範学校時代の朝倉正一さん



飛行服を着た出陣姿の朝倉正一さん

朝倉 正一さん (石川県加賀市)

弟に託した思い

家族写真が生証し

に師範を卒業した。四男の志良さんは医師になった。近くにノモンハンへの参

館学校に行ってくれや。朝倉の墓を守って親孝行をしてくれ」と言った。「男四

封筒と白い封筒があった。正夫さんが大きな封筒のほうを開くと、兄の飛行士姿の写真、白い封筒には髪の毛が入っていた。頭のとっぺんから足先まで震えた。兄が用意した遺影だった。母の周さんもそれを見つめるだけだった。夕食は、周さんの精いっぱいの手作りのごちそうだった。皆が普段通りに振る舞うのだが、いつもと違うのはどう

「兄は遺影を残しましたが、遺書も、手紙一枚も残さなかった。まっすぐな心だったと思う。兄が残した字といえば、師範の学生時に残した書き初め。母はその書き初めを表装して軸物にした。この一枚しか、兄の自筆はありません」

謀、辻政信の生家がある。正夫さんは「兄は辻政信に心酔している節はまったくなかった。村では辻さんが帰ると、道の両脇に並んで迎えたものですが」と話す。

人の兄弟がいれば、誰かが兵隊に行かなければなるまい。おまえが師範学校に入って自分の代わりに教師になって、親孝行をしてほしい。この戦争はあと五年も続くまい」とも口にした。正一さんは翌年、学生の徴兵猶予制度が停止され、学徒出陣があるとは思わなかったように、既に海軍に入ることを決心していた。十八年九月末日に、卒業

しょうもないことだった。「明日、おまえは学校を休め。写真を撮りに大聖寺に行く」。兄の言葉に、弟たちは黙ってうなずいた。写真は両親、親子六人、兄弟四人を撮った。そろって撮った写真は最初で最後になった。長男として家族を思つて気持ちは前であった。特攻に出る前の十一月初旬、父母は広島島の呉に面会

「零戦で特攻して敵艦に体当たりをして、死んでしまった兄。周りの多くの人は勇ましいことだと褒めたが、私は悔しかった。兄の命を奪った戦争が憎かったですね。私は以来軍歌を歌うことは、これまでにいたるまでありません。いや、歌いたくない」。正夫さんの言葉が私の心に残った。(はやせ・とおる「文筆業」)

■ □ ■ □ ■ □

■ □ ■ □ ■ □

■ □ ■ □ ■ □